

雑誌『半月』における施蛰存

斎藤敏康

はじめに

中華民国期の文学改革を語る際には一般にいくつかの重要なメルクマールが存在する。たとえば1915年の『新青年』の創刊、18年魯迅「狂人日記」の発表、19年「五四運動」の勃発などである。上記の一連の過程を「五四文化運動」と一括することも従来から行なわれてきた。20年代にはいると、21年に文学研究会、22年には創造社が創設されて、西欧的な近代文学の創作が本格化する。しかしこれらの文学史的な言説は改革を牽引した象徴的な事件や状況の記述を連ねたものであって、この時代に新文学を志すことになる青年たちは、普通には変革の先触れとなる文学史的な事件にやや遅れながら新しい思潮への関心を深め、一定の習作期を経て、作家あるいは文学者として自立していったのである。

たとえば30年代の上海にあって最も先端的な現代主義文学の担い手であった施蛰存（1905～）の文学的出発は10年代後半の鴛鴦蝴蝶派と呼ばれる通俗文芸誌への投稿にはじまる。施蛰存の文学観の転換、すなわち鴛鴦蝴蝶派と新文学の違いを認識し新文学へのアイデンティティを深めていく過程、あるいは通俗文芸に特有の近世白話から現代白話文への文体の変化はいずれも20年代前半の初期創作期を経て、25年前後にいたってはじめて一通りの転換が遂げられたといえる。しかしその時点でも彼の小説世界はまだ伝統的な物語の枠組みを脱してはおらず、施蛰存を特徴づける都市的な心理主義文学が現れるのは28年以降のことである。¹⁾

本稿は、その創作においてフロイディズムの観念を駆使し、中国における「新感覚派」などとも称された施蛰存文学が生まれてくる過程にあって、雑誌『半月』に投稿された習作期の創作、エッセーを検討することによって、施蛰存の文学の祖型と新文学への変化の胎動を確認したいと考える。

I. 施蛰存の習作期と『半月』

『半月』という雑誌は、1921年9月、上海の大東書局から発行された。鴛鴦蝴蝶派の大御所周瘦鵬の主編になる文芸誌で、4年余のあいだに96号を発行して25年11月に停刊している。鴛鴦蝴蝶派文学は清末に起こり、1905年に発刊された『礼拜六』が人気を博して以降、幅広い識字層に

普及する。そして新文学が文壇の主流になって後も、民国期を通じて根強い人気を保ちつづけた大衆文学である。特に20年代前半は民国期通俗文学のいくつかのピークのうちの一つを形作っており、『半月』をはじめ『小説世界』『紅雑誌』『心声』『星期』『社会之花』などの文芸誌がよく読まれ、続いて25、6年にはさらに『紅玫瑰』『紫羅蘭』『良友』『新月』などの民国期通俗文学を代表する雑誌が登場する時期にあっている。

『半月』は毎月1日と16日発行の半月刊で毎号約百頁、主な執筆者は周瘦鵬、包天笑、陳小蝶、李涵秋、張舎我、海上説夢人、天虚我生、程小青、袁寒雲、沈禹鐘、金嘯梅など名の通った当代の作家が多数登場していて、編者である周瘦鵬の人脈を感じさせるとともに、『半月』がこの世界では相当に格の高い雑誌であったことをうかがわせる。掲載されている作品の傾向は多様ではあるが、当世風の若い男女を主人公に配した「言情小説」「社会小説」に類するものが比較的多く、読者対象も10代から30代の比較的若い層を狙っているように思われる。

1919年に高等小学校を卒業した施蛰存は、その年に松江にある江蘇省立第三中学に入学している。14歳のことである。21年に中学を卒業すると、一旦は杭州の之江大学に学ぶが、翌年には上海へ出て、上海大学に籍を置く。中学時代に優れた文章家の国文教師に就いて学んだという施蛰存は『豫章集』『東坡集』『李長吉集』などに親炙するかたわら自らも七律を作って雑誌に投稿するようになる。その後、新文学に転換した『小説月報』の影響もあって創作の興味は詩詞から小説、散文に移っていくのであるが、19年の雑誌『覚悟』への投稿から25年頃までの習作期に書いた作品を年次に従って整理すれば以下のようなになる。

1919：民国日報副刊『覚悟』に旧詩を投稿

1921：杭州で「蘭社」を組織。『蘭友』を発刊（四開旬刊）。同人に杜衡、張天翼、葉秋原等『礼拝六』『星期』等の雑誌に詩文を投稿

1922：4.1「恢服名誉之夢」（青萍）『礼拝六』第156期

5.13「老畫師」（施青萍）『礼拝六』第161期

6.25「寂寞的街」（施青萍）『星期』第17号

9.6「半月兒女詞」（施青萍）『半月』第2卷第1号

1923：3.2「伯叔之間」（施青萍）『半月』第2卷第12号

4.16「山歌綴俊」（施青萍）『半月』第2卷第15号

6.4「童妃記」（施青萍）『半月』第2卷第19号

7.30「蘋華室詩見」（施蛰存）『時事新報・文学』第100期

8.1『江干集』（施青萍）※現在未公表

「冷淡的心」「洋油」「上海来的客人」「船廠主進城」「父與母」「禮拜堂内」「手套」「姐弟」「梵村歌侶」「火鐘的安放」「鄉人」「兩日之出家」「十三頁半」「路役」「雪橇御人談」「貧富與智慧」「守節者」「渡船」「屠税局長」「歡樂之夜」「猫頭鷹」「孤獨者」「創作余墨」代跋（維娜絲文学会「維娜絲叢書」第一種100冊印行）

11.8「紅禪室漫記」（施青萍）『半月』第3卷第4号

12.22「紅禪室漫記」（施青萍）『半月』第3卷第7号

1924：1.6「聖誕華筵記」（施青萍）『半月』第3卷第8号

2.5「綵勝記」（施青萍）『半月』第3卷第10号

3.5 「紅禪室漫記」（施青萍）『半月』第3巻第12号

7.16 「半月小酒令」（補白）（青萍）『半月』第3巻第21号

1925：5.7 「棄家記」（施青萍）『半月』第4巻第10号

作品の後ろの括弧は筆名である。施蛰存は作家・文学研究者として十指に余る筆名を使っているが、この当時おもに使用していたのは施青萍という筆名であった。『半月』についてみると、1922年9月6日から25年5月7日の約2年8ヶ月の間に、細大漏らさず数えれば10点の作品（及びその他1点）を見いだすことができる。いわゆる特約原稿ではなくすべて投稿によるものであったと考えられる。

この時期の施蛰存の作品は上記にとどまるとは考えられず、調査を進めればなお埋もれた作品を発見できる可能性は高いと思われる。また『蘭友』のようにその存在が知られておりながらなお閲読ができない雑誌がある²⁾。さらに『江干集』は施蛰存が自主出版した初めてのアンソロジーであり、伝統文学から新文学へのかれの転換を考察するに不可欠の文献であるが、これも施蛰存本人の希望によって、現在のところ閲読不能である³⁾。そもそも本稿で検討対象にする『半月』所載作品を含めて、この時期の作品は、施蛰存の20～30年代に出版された作品集にも、『十年創作集 施蛰存文集』（華東師範大学出版社）や『施蛰存七十年文集』（上海文芸出版社）など80年代以降に出版された選集にもまったく収録されていない。したがって施蛰存のこの時期の文学傾向を網羅的に検討することはまだできないのであるが、『半月』所載の作品はこの時期の創作において質量ともに高いウェートを占めていると考えられ、これを鑑賞することによって、施蛰存文学の形成に関わるいくつかの側面を明らかにするとは可能であると思われる。

以下、個々の作品を味読していきたい。

II. 施蛰存の『半月』所載作品

(1) 「半月兒女詞」（第2巻第1号，1922.9.6）

『半月』第2巻第1号は一周年特集号になっていて、天虚我生、沈松僊、范烟橋等が祝文を寄せている。それらに伍して掲載された「半月兒女詞」は、詞書と「一斛珠」「蝶戀花」「行香子」「醉花蔭」「巫山一段雲」「喝火令」「極相思」「億蘿月」「好女兒」「步蟾宮」「錦帳春」「羅敷媚」「減字木蘭花」「醉太平」「步虚調」と題する15首の詞からなっている。『半月』は美しい女性を描いた絵が毎号の表紙を飾っているが、発刊一周年を経て、24号発行された『半月』前半の15号の表紙絵の女性を称え、絵に和して讃を付するような心持ちで作ったものと思われる。編集者の周瘦鵬はその出来映えに「感服」して、後半の9号については詠われていないことを惜しむ気持ちから、施蛰存に続編を懇請するが叶えられなかったために、急遽、陳翠娜女史に付け足してもらったと掲載の経緯を述べ、「清詞麗句」が『半月』を光らせてくれたとして、施蛰存、陳翠娜のふたりに「敬謝」している。

施蛰存は詞書に次のように述べる。

半月女兒 倩絶丰姿 一編在懷 浮香溢脂 輕顰曼睞 作伊人思 思之慕之 寵之以詞

（半月の女性たちの艶やかさ麗しさ 懷に一編を忍ばせれば 艶やかな紅、漂う香りがわれ

らを虜にする これを思い慕い愛おしむに詩をもってしよう)
 続いて第1号、第2号の表紙への讃歌を紹介する。

一斛珠

春魂無據 芳心脈脈憑誰訴 行行又到花深處 懷抱芬馨 擷得花無數 無那情絲抽縷 低頭
 獨對花兒語 人間只有儂憐汝 無頼東風 莫便輕相許

（春の魂は寄る辺なく 芳しき心脈脈として誰にか訴えん 行き行きてまた到る花の深き処
 香しき馨を抱いて 摘み得たる無数の花を 情感の絲縷々と紡ぐことなく 頭を垂れて独り
 花に対して語る この世であなを愛しむのは只わたしだけ 無頼な東風と軽々しく契り合
 ってはなりません）

蝶戀花

青鳳緑么年紀小 楊柳春風模樣苗條好 悶則簸錢閒鬪草 閨中生活都成妙 織手頻將蝴蝶掇
 蝶也知情 只向身邊繞 不道惹將春色惱 清明寒食匆匆了

（緑滴る若き鳳は 春風に揺れる楊柳のごとすらりと見目よく 心塞げば錢投げ遊び暇な時
 には草引いて遊ぶ 閨中の暮らしは誠に愉し か細き手もて頻りに蝶を逐えど 蝶もまた情
 を知るやただひたすらに纏いつく 春色を悩ますというなかれ 清明の寒食は瞬く間に過ぎ
 行く）

女性の形象や心情が嫋々とした風情で詠われている。措辞は巧みであるとはいえ、常套的であ
 って情歌としてそれほど個性的というわけではない。しかし、江蘇省立第三中学の国文教師の薰
 陶のたまものか、17歳という若さでありながら施蛰存の詩詞に対する研鑽と造詣は相当深いもの
 が窺われ、「半月兒女詞」にもそうした早熟な才華がいかに発揮されている。この詞の連作
 が周瘦鵬の眼にとまり、褒辞とともに雑誌に掲載されたことは、無名の青年にとって望外の、晴
 れがましい『半月』へのデビューであったであろう。蛰存青年の投稿意欲が大いに刺激されたこ
 とは想像にかたくない。

(2) 「伯叔之間」(第2巻第12号, 1923.3.2)

「伯叔之間」は白話体の短い小説である。小明と近仁の小さな兄弟がいて、二人とも母親のこ
 とは「ママ(媽媽)」と呼んでいるが、父親のことは、近仁が「お父さん」と呼ぶのに対して、
 小明は「叔父さん」と呼ぶように躰けられている。それは父が小明を嫌いだからじゃないかとい
 う近仁。小明は思い切って父にそのことを尋ねてみる。父は、小明の本当の父親は小明がまだ二
 歳だった6年前に戦争で亡くなったのだと告げる。

12月のある寒い日、戸口に見知らぬ男が立ったまま躊躇している。父が招じ入れると、驚いた
 ことにそれは6年前に戦争で死んだはずの小明の本当の父親であった。「成兄さんまだ生きてお
 られましたか」、「財よ、今帰ったよ」。実は何事が起こったのか小明にも近仁にもまだよく事情
 がのみこめないのだが、ふたりの兄弟の母親はテーブルの傍らで顔を紅くして当惑したまま、声
 もなく立ち尽くすのだった。

語り終えて結尾で、作者は直接読者にひとこと語りかける。「秋窓にあつて風雨の中、暫し無
 聊のままに座してこの一局を布置した。蓋しまた問題小説であろう。読者なら如何に解決するで
 あろうか」。これは旧小説的な語りの手法を踏襲しているのだが、注意したいことは施蛰存が自

らの作品を「問題小説」として押し出していることであろう。問題小説はもともと『小説月報』に載った謝冰心らの小説に対して名づけられた新文学の呼称であったが、鴛鴦蝴蝶派の作家たちもいち早くこうした物語の仕立てを取り入れていることが窺われる。

施蛰存が「問題小説」という形で提起したかったのは、田舎ではよくある「叔接嫂」（兄の死後、弟が兄嫁と結婚して家を継ぐこと）と呼ばれる習慣が時にもたらす悲劇である。施蛰存の場合は女性の運命という観点からこの習慣を「問題」にする。この小説の本当の主人公は成，財ふたりの兄弟の妻になって小明と近仁ふたりの母となった，小説中では名もあたえられていない女性である。やや下世話な話柄を通俗的な筋立てに仕立ててはいるが，後の「周夫人」や「春陽」などに引き継がれるような女性形象への関心をすでにここに窺うことができる。

表現のレベルでも，ナイーブな少年の眼を通した女性の羞恥の描写にはすでに後年の精彩を窺うことができる。例えば，

「小明看他的叔叔神氣，再看他的媽媽不十分白的臉上一陣陣的泛出紅色。好像解一個謎一樣，始終不能解出他。只能懷疑著，也不敢再澈底的問他的叔叔」

「同時小明和近仁都想起了他們的媽媽，便擡起頭來看。他們媽媽卻立在桌子旁邊默默地一聲也不響。他們奇怪了不覺叫道“唉媽媽為什麼紅著臉不做聲呢”」

といった描写である。前者は小明が，父は伯父なのになぜママだけ本当の母なのかと問うのに対して，父が「そういうことは将来，自然にわかってくるものだよ」と答えることへの反応である。後者は二人の夫を目の前にした母の様子を子どもの眼を通して描いている。寡黙な女性の「顔を赧らめた」表情に込められている恥じらいや驚愕の感情を，少年は不可思議な思いで読み取るのである。

(3) 「山歌綴俊」（第2巻第15号，1923.4.16）

「山歌綴俊」は前作から一転して民間の小曲，フォークロアに関する紹介と考察からなる散文である。施蛰存はここで月亮彎彎，黃狗，紹歌，杭歌，吳船山歌，時調小曲，相思曲など約20曲の山歌を紹介しながら短い批評を挟む形で叙述をすすめている。

山歌に対する関心と注目を施蛰存は次のように述べる。

「老婆が幼子を抱いて上がり框に腰掛け，村の女は菜を摘み，男は畑を耕し，樵夫はいつも山で暮らす，みないつも暇潰しに山歌を口ずさんでいる。山歌の歌詞は俚俗ではあるがよく読めばすべてが優美なことば（俊語）なのである。

おそらく平民文学のなかの最も叙情的な表現を，中国の歴代の文人は卑しいもの，大雅に相当しないものとしてことごとく無視してきた。今，平民文学なるものが大いに起こって山歌もまた重要な位置を占めるようになってきたのである」

「平民文学」とは陳独秀が提唱していらい文壇でしばしば語られる当時の文芸思潮のキイ・ワードであったが，施蛰存はそれを「民間の俗謡に取材した文学」という側面に重きを置いて理解している。平民の社会，生活を描くという一般的命題が，施蛰存にあっては俗謡の世界に存在する情趣に文学的なモチーフを求めるといふ形に具体化するのである。それは「平民文学」に関する当時のさまざまな理解の一傾向に属するもので，とりたてて独特であったわけではないが，施蛰存が「民衆を描く」ということをそのような角度から理解していたことはかれの文学の性格を

考える上で重要である。

山歌との出会い、山歌になじんだ幼少時代について、施蛰存は自分を育ててくれた「女傭（女中）」の影響が大きいと回憶している。

「私が思うには、山歌は越を以て最も多となすと思う。私がもともと越の人間であるために、家で女中を傭うのも会稽籍の女であって、その女中は私の家に傭われて20年近く、私も彼女に育てられた。子どもの頃、家が蘇州の醋庫巷にあって、庭に二本の大きな桂の木があった。彼女は毎日私を抱いてその木の下に腰掛けて、私に山歌を二三曲歌って聞かせてくれた。高く澄んだ声がとても愉しげであった。一月月過ぎてはまだタネぎれにはならなかった。であるから私は山歌は越が最も多いというのである」

続いて施蛰存は何曲かの山歌を紹介し簡単な批評をこころみている。

紹興一帯の山歌「月亮彎彎」を紹介して「嫁いだ女が里帰りした時の実家の情景を述べる。溢れんばかりの喜びと興奮である」と評する。里帰りした女性の解放感、家族に会った喜びと興奮の感情に施蛰存が深く共鳴していることに注意をはらっておきたい。

杭州の山歌「黄狗」を評して次のように述べる。「少女は、髪を櫛削る（頭髪を結う）ことができるようになればお嫁にいけると知っている。口調は婉曲で美しく秋に生える鳥獣の毛の末端のように微妙で繊細である。」

また叔母たちが甥たちを誘惑するという親族の間の姦通を扱った戯れ歌めいた紹歌、杭歌を紹介し、明けつ広げなその歌いぶりを評して、「すっきりとしたそれでいて趣のあることばづかい、意図的なのかどうか、自然にまかせて作為がなく極めて痛快である。世の叔母たちがどのように弁解するのか知らないけれども」と述べる。

また山歌はなによりもそれぞれの郷村や民族に特有のメロディにのせて歌われるものであり、施蛰存も当然のことながら山歌の押韻、リズムにも関心をはらっている。かつて聞いた記憶のある一曲の紹介に続けて、「最後の二句で押韻が突然変化する。韻を踏んだたった二語が、兄と兄嫁の生き生きとした愛情を表現している。こうした効果をもつ言葉使いがどこの山歌で流布しているのか残念なことに詳らかにしない」と、言葉の音韻的な効果に留意している。

時調小曲と呼ばれる当世の流行り小唄については、次のような記述がみえる。

「時調小曲の中には優れたものもあると、他人が言うのを聞いたことがある。そこで書攤で漁ってみて凡そ百十余種類を得たが、すべて淫であって、誠に吐き気がしてくるほどに猥雑である。ただ中に《望郎十二首》だけが比較的優れているのでこれを全録する。」

その他に、苗歌、獠歌など少数民族の歌謡に関する記述もみえる。

短い散文中に20曲近い山歌を紹介し、書攤で百余種もの時調小曲を収集するなど、このように見てくると、施蛰存の山歌に対する興味と想い入れは相当なものであったといわねばならない。また、里帰りした女性の解放感、結婚に憧れる少女の想い、山歌に描出される娘の美しさ、俗謡に表れる不倫や姦通、音韻やリズムがもたらす表現効果など、総じて民間歌謡に歌われた女性の生活と愛情に、施蛰存の焦点が定まりつつあることを見て取ることができる。きわどい人情を歌っていても淫と不淫を区別して鑑賞する眼識も備えている。

南方の山歌、とりわけ呉越の山歌に歌われた人情風情は施蛰存文学の原風景であるといってもよい。施蛰存文学には都市心理文学的なモダニズムの側面とともに、江南の伝統文学につながる

近代から現代への過渡的性格をもった側面とが存在する。そして25年前後に発表された何編かの作品では、江南の風土に密着した一種の郷土文学とも評しうる雰囲気濃厚である。また周夫人、婢阿姨、素貞、卓佩珊夫人など、施蛰存が後に造形するやや保守的な女性主人公たちは、山歌で歌われる女たちのイメージをどこかに宿しているように思われる。苗歌の相聞歌の蝴蝶のモチーフは、ややユーモラスな情調とともに後の短編「蝴蝶」に写し取られている。

江南は古くから民間の歌謡が広く流布した地域であり、それらは繰り返し詩歌に歌われ、また文人によって採集もされてきた。また宋元代には戯曲や説話が盛んになり、それらも後の白話小説の淵源をなしていく。周樹人・周作人兄弟も日本留学から帰国の後、やはり古小説の収集などに携わったように、フォークロアへの関心と愛着は江南の文人に特有の感性であるのかも知れない。そこで、今ひとつ指摘しておかねばならないことは、施蛰存において山歌に対する関心はおそらく明末蘇州の市隠、馮夢龍に遡ることができるだろうということである。施蛰存から見て馮夢龍は『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』のいわゆる三言の作者としてよく知るところであったであろうが、山歌に関する興味や知識も少なからず馮夢龍に拠っているのではないかと思われる。今日、「馮夢龍全集」（上海古籍出版社）第42巻には「《山歌》又名《童癡二弄》十卷」と「掛枝兒」が収められており、山歌は私情、雑歌、咏物、私情雑体、私情長歌、雑咏長歌、桐城時興歌、その他に分類されて搜集、整理され評注が施されている。馮夢龍はその序文にあたる《叙山歌》で、「民間の性情の響きは詩壇に列せられず、山歌といわれた。田夫が畑において興に寄せるような行為は紳学士家の言及するところではなかった。そのため歌の権威は軽んぜられ、歌う者の心もまたいよいよ浅いものとされたのだ」と述べている。その論旨は上に紹介した施蛰存の山歌についての言説とほとんど重なると思われるし、馮夢龍の「山歌雖俚甚矣、獨非鄭衛之遺歟」と、施蛰存の「山歌雖俚俗、顧其中實皆俊語」とは、措辞においても相似た表現となっている。施蛰存が山歌への関心を深めていくそのいずれかの段階で、馮夢龍の採集した民歌や民間説話が視野に入っていたらうと、私は思う。

(4) 「童妃記」（第2巻第19号，1923.6.4）

「童妃記」は史伝に基づく再話・再構成の物語である。歴史書、歴史文献を渉猟して歴史故事を再構成しながら、そこに虚構的なプロットや人物造形を加味していくという、施蛰存における歴史小説作法の基になるスタイルがここにすでに表れている。しかし、数年後に実現するような歴史人物の現代心理学的な解釈やフロイディズムを踏まえた内面描写は、「童妃記」においては勿論まだ行なわれてはいない。

「童妃記」は次のような物語である。

明の福王、諱は由崧、初め世子として徳昌郡王に封ぜられる。妻黄氏は早没、次いで李氏を正妃に封ずる。

乱に遭って出奔、劉正学（宗）の機転に助けられ、身分を隠して淮安に逃避する。途中、曹州の新店に至り、酒家童姓の娘と懇ろの仲になる。

朱自成の乱の後、鳳陽総督馬士英らに迎えられて南京に入り、帝を称して、年号を弘（宏）光と改める。この時、河南を安堵した陳潜夫に童妃が投じ、自分は福王の寵愛を受けた童妃であると名乗る。しかしすでに帝位に就いた福王はこれを認めず、淫らな風説を撒き散らす輩として投

獄し、獄死に至らしめる。

一説に、獄卒が密かに妃を釈放し、国が滅んだ後、金陵の河南に尼として暮らしたともいわれる。

物語をこのように作りあげ、末尾に「中華民國十二年寒食雲間施青萍記」と識した蟄存は、その下に次のような附記を書きつけている。

「顧みるに何と言っても宏光の行為が軽率であるのだが、すでに遁辞もなく、群書を纂輯してこの一記を成した。読者は稗官の説としてこれを見ていただいたほうがよろしい。」

稗官とは昔時、巷間の逸聞や瑣事を帝に語って聞かせた小役人のことで、転じて小説家をさす。要するにフィクションであるということであり、ここに施蟄存の歴史小説家としての虚構意識の萌芽を明らかに見て取ることができる。

「童妃記」こそは、これまでのところ、「鳩摩羅什」「將軍の頭」「石秀」「孔雀膽」など後の施蟄存文学の精華ともいえる一連の歴史小説に先立つ、最初の歴史小説といえるのではないかとと思われる。整った文語文と巧みな措辞は当時の蟄存の文語による文章表現と文献搜集の力量を窺わせるにたる。このように、史伝に基づいてそこに虚構を施した物語こそが、施蟄存にあっては「小説」の原形として意識されていたものであることにも留意しておく必要がある。

(5) 「紅禪室漫記」(第3巻第4号, 1923.11.8 第3巻第7号, 1923.12.22 第3巻第12号, 1924.3.5)

施蟄存は、33年に著わした「我的創作生活之歷程」と題するエッセーの中で、中学時代から唐宋伝奇、水滸伝などに親しみ、『東坡集』などの宋词から『李義山集』『温飛卿集』『杜甫集』といった唐詩集を愛読し、さらに作詩にも熱中したと、少年時代の文学修養を振り返っている。そのような蟄存の古典への傾倒と、それによって得た豊富な知識が、「紅禪室漫記」と題した散文の基礎をなしていると思われる。

「紅禪室漫記」の旨とするところは、おもに江蘇地方の文人、妓女、書画、寺院等についての凡そ十数件の逸聞や散逸した詩文の紹介である。しかし、例外的には上海の大世界の遊興施設や『革命軍』を著わした清末の革命家、鄒容に触れた下りなどもある。以下、話題として取り上げられている文人、詩文のいくつかは以下のようなものである。

彭玉麟畫梅と題する絵画を友人が所蔵しており、そこに「年年江上憶家山 僕僕征夫未易還 窗外梅花無恙在 幾時相對笑開顔」という七絶一首が識されているという。友人が私蔵しているため一般には知られない逸品の紹介をこころみたものと思われる。

王月という蘇州の妓女について『板橋雜記』に識されている物語があるが、実はさらに許石疎が王月のために作った詩が存在するとして紹介している。

何義門(何焯)は豪気な一面のある人物で、帝驟に対して「老頭子」という言葉は、呉越にあっては尊称であると詭弁を弄して言い抜けをしたという逸話を紹介している。

また施蟄存の郷里、松江に程近い華亭の人で詞曲に巧みであったといわれる施紹莘、字は子野の事跡、逸話、詞曲などを紹介して、「艷語雅人」の詞は後世の味読に十分に耐えうると短評している。

呉軾の妻で、清代の人、莊盤珠の書『秋水軒』の刊本比較を行ない、詞一篇を紹介する。

その他、清代の二人の留仙すなわち蒲松齡と秦松齡を対比したり、松江の超果寺大殿の一覽楼

に残る黄山谷の扁額にまつわる「神話」について述べたりという調子である。

こうした随筆からは、後の現代主義作家施蛰存につながる確かな痕跡が見いだせるわけではない。ただ、多方面にわたる古蹟や文人の来歴あるいは逸聞の搜輯にこよない興味を持ちつづけるような性向は、特に歴史小説の創作における各種の史伝の比較検討やプロットの構築に活かされるところがあったのではないと思われる。

(6) 「聖誕華筵記」(第3巻第8号, 1924.1.6)

「華筵」は、文字通りには「華やかな宴席」の意であり、題名は聖誕節のパーティのこと。流浪の身を上海におく貧しい白系ロシア人一家と「私」の、心温まる聖誕節の交流を描いた短編である。

聖誕節の夕方、赤い塀や朱色の屋根瓦が夕陽に輝いている。私は静安寺路を歩いて帰宅する。

丁度家に帰り着いたところでマードリンの訪いを受けた。マードリンとその夫のサラフスキーは亡命ロシア人である。ピーターとカーリという、それぞれ12歳と7歳の息子がいる。サラフスキーは美術家であり、近頃ある美術学校の教師の職にありつくことができ、ようやく一家の暮らしを支えることができるようになった。その一家が7月に、アパートの私の部屋の真下の二部屋に引っ越してきた。互いに往来が始まると、かれらは私の語る中国の故事を好んで聴き、夜が更けるまで語り合うこともあった。

マードリンは、私を聖誕節の晩餐に招待したいという。訪ねてみると、古めかしい部屋にそこばかりは聖誕節の夜らしく十本程の蠟燭が灯され、卓の上にはパンと十数個の卵それにバターとジャム、ただそれだけのつつましい宴である。

ロシアの強い酒で乾杯。請われて「嫦娥が不死の薬を盗む」故事を語って皆に喜ばれる。続いて私のリクエストでピーターが歌う。行進曲を歌おうとすると、異国に流浪するわれらには相応しくないと、父のサラフスキーが言い、ピーターは「鼠蛙歌」を歌うことにする。続いてまた故事をせがまれて、今度は「西王母、穆天子に見える」の話をして聴かせる。

決して豊かではないが、心温まる聖誕節である。我々がもし富裕であったなら、この晩餐は逆に虚偽のものとなろう、とサラフスキーは言う。

「さて読者の皆さん、私は寒灯の下でこの文章を草して、『聖誕華筵』と題した。若い人たちには兎も角、世間の酸いも甘いも嗅ぎ分けた老世代の方々には同意していただけるであろう。富豪の宴の華やかさなど形式だけのことなのである。」

施蛰存は、このように貧しさの中で健気に生きるロシア人家族の姿を、善人の暖かい人情物語に仕立てて描き出す。人物の造形も、顛末を語り終えてから直接作者が顔をだして、ひとくさり教訓を垂れる引き際の構成も、ともに鴛鴦蝴蝶派の小説によく見られる定型ではあるが、詩歌から小説に転じて須臾の間に、この時期の小説作法のスタンダードを巧みに会得してしまうところに施蛰存の感性を感じることができる。

作中の「私」が、ディケンズ、ワーズワース、オー・ヘンリーなどの小説・詩を通してキリスト教文化への理解を深めつつあることがさりげなく示されるが、そうした西洋文化への接近の姿勢は当時の施蛰存自身に重ね合わせることも可能であろう。文体も、まだ旧白話の措辞を残すものの、かなり五四以降の白話文に近づいている。また貧しく迫害された人々への同情と暖かい眼

差しは、27、8年に一時革命文学に接近して以降の、やや社会性を帯びた時期の作品に継承されているといえる。

(7) 「綵勝記」(第3巻第10号, 1924.2.5)

一篇の題名にとられた「綵勝」とは本来、違菱のことである。絹を折り畳んで作った菱形を横に重ねて装飾にする。物語ではしかし、愛する男女の深い契りを象徴している。

この作品もまた「問題小説」たらんことをかなり意識した内容になっている。自由恋愛の主張とそれを抑圧するアンシャン・レジームの矛盾は、この時代にあっては、もはや殊更に新しい問題ではなかったが、一人一人の青年にとってはやはりその思想と生き方に関わる重要な問題であることに変わりはないのである。施蟄存はこのテーマに向けて以下のような「問題」を投げかけた。梗概である。

私のこの文章が読者の手許に届くのは、丁度元旦の頃であろう。そこで今、その出会いが元旦であった友人の恋物語を語るのもまた一趣向というものであろう。

我が友懷玲は、新年の挨拶をするために親戚を訪ない、そこで「神仙」のような娘雲玲と玉振り遊びをするうちに、雲玲が忘れられなくなってしまう。まだ愛情を経験していない少年が、未婚の女性に想いを抱く時、人はそれを淫という。しかし私はそれを「愛の芽生え」と呼びたいと思う。

帰宅して部屋に戻った懷玲は綵勝を弄ぶ。雲玲への想いがひとつの焦点を結んで、はっきりとした愛情が生まれ、懷玲は梅花の香りに事寄せて、雲玲に自らの愛を伝える。

だが、その間に懷玲の父親は某家との婚儀を進めている。懷玲は勿論承知できないのだが、父の権威に逆らう勇氣もなく、婚約が決まって行くのであった。懷玲は意を決して雲玲の許を訪れて、家を棄てて(棄家)一緒に逃げてほしいと頼む。最初は不同意だった雲玲もついに自ら育った家庭を棄てる決心をする。

しかし愛の逃避行は失敗し、追いつめられた懷玲は結婚式の当日、式典の最中に衣装を投げ捨てて式場を逃げだし失踪してしまう。そして雲玲もまた父親の嘆きをよそに行方知れずのままであった。

そして最後にまたしても作者である施青萍本人が出でましてひとくさり教訓を述べる。

「ここに識したことは事実に基づいて書いただけで、是も非も判断していない。それを判断するのは読者である。ただ私は世の父母たちにお願いをしておきたい。子女の婚姻の際にはぜひ勝手に自分でお決めにならないように。もし子女が不幸になれば心に傷つくのは子女たちなのだから」

「綵勝記」は、[偶然の出会い] — [父権という障害] — [逃避行の敢行] — [その失敗] — [破滅] というように、交互に禍福を織りまぜる構成を取っており、通俗的な悲恋物語としてよく出来ている。両人の意向を無視した婚姻に異をととなえ、少年の少女への想いは「愛の芽生え」であると主張して、「淫ら」という観念をしりぞける。また、自由恋愛は古い婚姻制度と鋭く矛盾するために、愛する二人が想いを遂げようとすれば「棄家」という重い代償を払わなければならないという社会の構造を告発しているのである。こうした思想をもつことは当時の進歩的な青年に一般的な傾向であって、すでに上海に出てきて上海大学で学んでいる施蟄存にとっても当然

の事として受け入れられる考え方であったと思われる。むしろこの作品で注目すべきことは、単なる問題提起ではなく、そうした思想を小説の器に盛ることによって、社会的な抗議を表明する姿勢を持ち始めていることであろう。テーマの性格からも傍観的ではありえない施蛰存の切実な思いが強く作品に反映したということもあろうけれども、同じ社会的な問題をあつかっても、観照的な描写から社会的な自己主張を強める方向へ徐々に作風が変化しつつあるというのが、「綵勝記」にみられる施蛰存の特徴である。

(8) 「棄家記」(第4巻第10号, 1925.5.7)

同じ「棄家」であっても、こちらは嫁姑の仲違いの間に立って、おのれの無力を自覚した挙げ句に家出してしまう男の物語を、多少の諧謔をこめてつくりだしている。

程武はまだ25歳にもならないのだが、「家庭社会」のためにすっかり厭世的になってしまっている。父とは早くに死に別れたが、母がおり妻もいて、三人で暮らす姿は傍目には仕合わせと映る。しかし「中国の老婦人には、大事にはかかずらわず、小事にかかずらう習性がある」。妻の方も「嫁姑」の間のこととなると理性的ではいられなくなる。という訳で中国の家庭ではよく見かける珍しくもないお話である。

この原因はやはり、分からず屋の母がなにかにつけて妻に向かってあれこれときつい言葉を投げつけるためである。しかし、程武が妻の側に立って母を非難することは不孝の罪を得ることになる。

どちらの味方もできず、思いあぐねた程武は「棄家」を決意して、勤めている郵便局の「郵政総管」(局長)に、他の都市への転配を願い出る。事情を知った局長は、程武の辛抱が足りないと諭しつつも、近からず遠からずといった土地に、程武の移動先を決めてくれる。帰りたくなったらいつでも帰ってこい、若い者は屈強だが、私にとっては家庭だけが唯一の楽園だよ、というのが局長の想いである。

程武は転勤した地で、薛少文という教師の家に下宿する。ここの家族も8歳の女の子がいることを除けば、程武の家と同じ家族構成で、しかも同じような嫁姑の諍いがあることも数日の内には分かかってしまって、程武は薛少文に同情を禁じ得ない。

ある日たまたま姑と話す機会があった。姑が言うには、いろいろと嫁にはきつく当たっているけれども、実は我が家の嫁は「賢婦」であって、愛しく思っているのですよと。このことを少文に知らせてやると、日頃から母親の嫁いびりに困り果てていた少文は驚きのあまり落涙して喜んだ。そしてこのことを涙とともに妻に語ると、妻も心から理解してくれたというのだ。

自分の所はこれほど生易しくはないのだと思う程武であったが、体調が悪く欠勤した日、少文の8歳になる娘に父母と祖母の関係をどう見ているか尋ねてみると、殊勝なことに事情をよくわきまえていて、父も母も祖母もみな大切だと答えるのであった。

ここに至って程武も、家のない者の苦痛を悟って、家へ帰る決意をする。と同時に、郵便局長の深い見識に初めて畏敬の念を覚えるのであった。

「棄家記」は、教訓披瀝型の物語に仕上がっているといえるだろう。姑の無理無体を理解してやるのが孝行であって、息子や嫁は忍耐が大切であると説く。家長たる男の任務として「家庭社会」の煩わしさに耐えて家族の仕合わせをはからねばならない。実際、家を喪うことは辛いこ

となのだ、というわけである。その傍証として配されるのが、いわば「忍耐」型局長の人格者ぶりとその家庭観であって、最後には彼の見識に敬服するという結論に落ち着く。

現実を批判的に見る問題提起ではなくて、逆に「問題」を現実的な価値観の枠の中に押さえ込んでしまおうとする意識が、ここでは支配的である。

このように、現実を肯定的に、あるいは変えられないものとして描き出し、それへの適応、順応、同化を求める、そうすることで現実を支えている思想の肯定や承認を迫るのが、おおかたの類型的な通俗物語の特徴だとすれば、「棄家記」はそうした特徴をもった短編である。しかし、これ以降の施蛰存の文学からはこうしたパターンの作品は脱落していく。

この脱落は、施蛰存が「鴛鴦蝴蝶派」と「新文学」の溝の深いことを理解したという「我的創作生活之歷程」の中の次の述懐と共鳴するだろうと、私は考える。

「新文学と鴛鴦蝴蝶派との間に深い溝のあることを知った私は、鴛鴦蝴蝶派への投稿をやめた。同時に、新文学雑誌のなかに私の入りこむ余地がなかったので、私は何も書かなくなってしまう。中学を卒業したあと、之江大学から、上海大学、大同大学、震旦大学と渡り歩いた。その五、六年間は私の思想と生活において最も混乱した時期である。私はむやみやたらと本を読んだ。文芸書はすべてがよいものと思え、手当たり次第に読んだのである。それも読むだけでなく、書き写した。之江大学の図書館では、『英国詩選』を、大同大学の文芸書に乏しい図書館では、『世界短編小説選』⁴⁾を書き写した。その作業が私には当時気に入っていた。」

施蛰存が鴛鴦蝴蝶派の雑誌に投稿をくりかえしたのは、簡単にいえば鴛鴦蝴蝶派の雑誌だけが彼の作品を掲載してくれたからである。施蛰存自身は、鴛鴦蝴蝶派を自任したことはなく、自分の作品は「純然たる写実主義」にすぎないと述べている。しかし『礼拜六』にせよ『半月』にせよ、掲載してくれた雑誌の文学的性格が蛰存の創作の規範として作用していくことは避けがたい。逆にいえば当時の施蛰存の作品は新文学の側からは評価される内実をもたなかったのだといわなければならない。施蛰存が鴛鴦蝴蝶派的な作法から新文学の側に転換するためには、英語、フランス語という外国語を本格的に学び、文芸書を原書で読み、書き写し、翻訳するという数年間の文体練磨の時期が必要であった。こうした営みを通して、施蛰存は五四白話の文体と西欧的な小説作法を会得していったのである。

そのような勉学と読書に明け暮れた大学生生活の深まりとともに、施蛰存における『半月』の世界からの離脱が本格化していく。

おわりに

『半月』第3巻第21号(1924.7.16)に、「半月小酒令」と題する「補白」(埋め草)が載っている。酒令とは酒席の興をたすける遊戯のことであるが、ここでは唐詩の中から五言、七言の、末尾の一字が、『半月』に寄稿する常連作家の名前の上の一字と同じになるような一句を選んで並べるのである。たとえば「洞庭秋水遠連天 天笑」という具合である。そのように合計24句24名の作家が並ぶのだが、施蛰存の名前は、五言句の二番目に「魂来楓林青 青萍」と見える。練達の作家たちに伍して、作品の点数も多いとはいえない二十歳前の青年がこのように評価されるの

は、やはりその作品の一つ一つが、同業作家や読者に印象深い読後感をあたえているということであろうか。

これまで見てきたように、施蛰存は『半月』への投稿をつうじて、結果的にさまざまな試みを実現している。「問題小説」嘗試し、歴史小説に筆を染め、山歌の世界のイメージから郷土文学的ないろあいの濃い短編をものし、といった具合である。しかし、鴛鴦蝴蝶派雑誌を舞台にして行なわれたそれらの試みは、「棄家記」とそれ以降の文学修養からも窺えるように、ほかならぬ鴛鴦蝴蝶派の世界を離脱する里程標となっている。こうした過程をへて、施蛰存は戴望舒などと共に、自覚的に新文学を志す同人誌の発刊に動く。それが1926年3月の『瓔珞』であり、『瓔珞』誌に依拠した文学活動が新文学作家としての矜持を伴った施蛰存の出発点となるのである。

注

- 1) 拙著「『新的路径』を歩み始めるまでの施蛰存」（中国文芸研究会編『野草』第58号、1996年）及び、拙著「施蛰存とA.シュニツラー—『婦心三部曲』と「霧」「春陽」」（中国文芸研究会編『野草』第66号、2000年）参照。
- 2) 上海図書館新館所蔵。未公開。稀覯雑誌であるためマイクロ化を行なう計画であると聞く。
- 3) 上海図書館新館が所蔵するが、閲読停止の措置がとられている。現在は「幻の書」になっている『江干集』を上海図書館で初めて発見した應國清氏は、一読の印象を、鴛鴦蝴蝶派というよりも平明な写実主義の作品と評している。施蛰存は『上元灯』（1928年出版）をもって自己の文学的出発と見なしており、それ以前の習作期の作品は、施蛰存文学の範疇にははいらないとしている。
- 4) 『創作的経験』（1933年5月、天馬書店）所収。翻訳は青野繁治『砂の上の足跡—或る中国モダニズムの回想』（大阪外国語大学学術出版委員会、1999年）に拠る。